

明治の新聞を活用した歴史の授業

—明治時代にグローバルに活躍した郷土の偉人中村直吉—

History Class That Utilizes the Newspaper of the Meiji
- Nakamura Naokichi Local Greats who Played Globally in the Meiji era -

楠元町子 (Machiko KUSUMOTO)

1. はじめに

2009年に実施された経済協力開発機構(OECD)のPISA調査¹の結果によれば、我が国の高等学校1年生は情報相互の関係性を理解して解釈したり、自らの知識や経験と結び付けたりすることが苦手であることが指摘された。また2010年度の小・中学校全国学力・学習状況調査の結果で、資料や調査に基づいて自分の考えや感想を明確に記述すること、日常的な事象について筋道を立てて考え、数学的に表現することなど、思考力・判断力・表現力等といった「活用」に関する記述式問題を中心に課題が見られた²。

以上のことから社会科の授業において、思考力・判断力・表現力等の育成と言語活動の充実が求められている。文部科学省は、2008年度学習指導要領改訂の重要点の一つとして、「言葉の力を使って、子どもたちの思考力・判断力・表現力の育成」を挙げ、社会科では「社会的な事柄について、資料を読み取り解釈し、考えたことを説明したり、自分の意見をまとめた上で、他の子どもと意見交換したりする活動を進める」³としている。

歴史学習においても認識の結果を記憶することに重点を置く学習から、主体的に課題に取り組む関心・意欲や認識の方法、学び方に重点を置く学習へと転換させなければならない⁴。そのためには、子どもたちが歴史を学ぶにあたってその時代の資料を活用して、歴史を具体的に実感させるとともに、資料を批判的に読み、考え、話し合いをさせる授業が必要である。本稿は、その一つの試みとして明治の新聞記事を用いた中村直吉の授業を提案したい。

中村直吉(1865-1932)は、愛知県豊橋市に生まれ、1901(明治34)年無銭徒歩世界一周旅行の旅に出発する前に、地域新聞の『参陽新報』に「告別」の記事を掲載し、世界一周の旅を決意した理由と自分の不在の間家業の帽子業の愛顧のお願い、世界で知りえた情報を発信する用意があることを世間に公表した。1907(明治40)年に帰国するまで、世界の旅先から度々『参陽新報』や『新朝報』に、自分の消息を伝えると同時に最新の世界情報を新聞の読者に知らせた。帰国後その体験談をまとめ、押川春波との共著で『五大州探検記全五巻』を出版した。

中村直吉が実際に見た20世紀初頭の世界は、世紀転換期であり、アジアの一国である日本が西欧中心の列強諸国に肩を並べようと邁進していた時期であった。普通の庶民である中村直吉の行動を見ることによって、当時の日本人の意識や願いを読み取る事や、米国の中村直吉の記事を検討する事で、米国の日本人に対する感情の一端を見ることが出来ると思われる。

中村直吉に関する主なる論文としては、中村直吉の世界一周旅行の実態を新聞記事等から詳細に解明した川瀬芳彦の論文⁵がある。昔の新聞を活用した授業としては、佐藤有紀・久保田亘の明治期から昭和期に至る「昔の新聞」の体系的な学習材化を目指した研究⁶がある。

本稿はこれらの貴重な成果を踏まえ、日本と米国の新聞に掲載された中村直吉の記事を考察することで、明治時代にグローバルの視点を持ち、好奇心と行動力から世界一周を成し遂げた中村直吉の実像を明らかにするとともに、明治の新聞記事を活用することで子どもたちが具体的に歴史を実感し、考えさせる授業を提案したい。

2. 歴史学習における新聞の活用

2008年度小学校学習指導要領では、小学校社会科の目標として「社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。」とある。日本の歴史については主に第6学年で学ぶが、第3学年及び第4学年の学習内容として「地域の人々の生活について、次のことを見学、調査したり年表にまとめたりして調べ、人々の生活の変化や人々の願い、地域の人々の生活に向上に尽した先人の働きや苦心を考えるようにする。」とあり、開発、教育、文化、産業などの面で地域の発展に尽した先人の具体例を挙げるとしている⁷。

第6学年の学習内容として「我が国の歴史上の主な事象について、人物の働きや代表的な文化遺産を中心に遺跡や文化財、資料などを活用して調べ、歴史を学ぶ意味を考えるようにするとともに、自分たちの生活の歴史的背景、我が国の歴史や先人の働きについて理解と関心を深めるようにする。」⁸とある。内容の取扱いでは、「児童の興味・関心を重視し、取り上げる人物や文化遺産の重点の置き方に工夫を加えるなど精選して具体的に理解できるようにする」⁹とある。小学校の歴史学習は、人物の働きや文化遺産を中心として学習し、歴史を学ぶ楽しさを味あわせ、その大切さに気付かせることが重視されている。

2008年度中学校学習指導要領社会の「歴史的分野」の目標において「身近な地域の歴史や具体的な事象の学習を通して歴史に対する興味・関心を高め、様々な資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる」とある。身近な地域や具体的な事象を取り上げることでその時代の様子を実感させ、生徒の歴史に対する興味・関心を高めることが求められる。

また、個々の生徒の学習活動をより活発で主体的なものとするために、文献や絵図、地図、統計など歴史学習にかかわる様々な性格の資料を使用し、歴史的事象を一面的にとらえることなく公正に判断する能力の育成が大切である¹⁰。歴史上の人物について学習する際の留意点として、「その人物の果たした歴史的、社会的な役割や生き方を生徒自らの生き方とかかわらせて、多面的・多角的に考察して具体的にとらえさせることが大切である。」¹¹、改善の具体的事項として「我が国の歴史の背景にある世界の歴史の扱いを充実させる」とある。

上記のことから児童生徒が歴史を学ぶにあたって、「具体性や実感をもたせながら、我が国の歴史の動きを理解する」¹²ことができる教材が求められていると言える。明治という日本の

大転換期に世界に旅立った郷土の人物を取り上げることに、歴史を身近に感じるとともに、20世紀初頭の世界を具体的に理解する一助になると考える。現在若者が内向き傾向にあり、世界に関心がないと言われているが、明治の時代に世界徒歩一周旅行を実現した中村直吉の行動力と情報発信力を学ぶことは、児童生徒にとっても大きな刺激となると考える。

新聞は極めて歴史資料としての価値が高いが、断面的にしか使用されていない。新聞は繰り返し読むことが出来、保存された新聞は歴史の記録として重要な資料となるが、社会科授業において、有効に活用されているとは言い難い。「二・二六事件」「第二次世界大戦の開戦」など歴史的な事件について、いかに報道したか、当時の人々の反応はどうであったかを新聞記事を用いて考えさせる授業例などはあるが、『昔の新聞』を通して、その時代に生きた人々の思いや願いに触れる実践も可能と考えられるが、そうした実践もほとんど見られていない。¹³更に「新聞の記事は、子どもたちが平易な創作物語から、歴史学や社会科学の記述のような説明記述に移行する際に、溝の橋渡しとなるような有効なノンフィクションの教材」¹⁴であり、特に長期間にわたって一つの事象を追った記事は、児童生徒にとって歴史を具体的に理解する貴重な資料となる。

新聞記事は、内容に書く人の意向が含まれる危険性があるため、資料を批判的に読む訓練にもなる。明治時代の新聞は言葉が難解であるため、文意を損なわないように注意しながら、児童生徒の発達段階を考慮して、分かりやすい文章に書き直す必要があると思われる。授業で用いる場合は、新聞記事をそのまま電子黒板等に写し出し、原文の雰囲気を感じさせるとともに、児童生徒には現代文に書き直したプリントを配布し、記事の内容を読み取らせたい。

3. 中村直吉と日本の新聞記事

1) 中村直吉の人物像

中村直吉は1865（慶応元）年6月25日、吉田（豊橋市）呉服町に生まれた。生来の旅行好きで自ら「旅行狂」あるいは「風船玉」と称してはばからなかったと伝えている¹⁵。中村直吉は、1887（明治20）年福沢諭吉が提唱した「アメリカ日本村建設構想」に共鳴し、渡米を決心した。後援者は諭吉7人侍の一人の横浜正金銀行頭取中村道太であった。しかし渡航責任者井上角五郎が政治的事件に巻き込まれ、計画は中止された。中村直吉は1888（明治21）年春単身渡米し働きながら北米各地をめぐり、1893（明治26）年に一時帰国した¹⁶。同年豊橋市鍛冶町で帽子業を開業するとともに民党青年同志会を結成し、ついで豊橋改進黨に加わり、政治活動を開始した。1894（明治27）年再びカナダ、ハワイに渡航し、1898（明治31）年に帰国した。1901（明治34）年8月に加藤六蔵・後藤文一郎・矢崎茂・服部弥八・浅井常三など10人から10円ずつ支援を受けて無銭徒歩世界一周の旅に出発し、1907（明治40）年6月に帰国した¹⁷。

帰国後押川春波との共著で『五大州探検記』として『亜細大陸横行』『南洋印度奇観』『鉄脚縦横』『阿弗利加一周』『欧州無銭旅行』を出版しその後『世界探検十五万里』『アマゾン探検記』を出版した。これらの本によれば中村直吉の無銭世界徒歩一周旅行は次のようであった。

1901(明治 34)年 8 月 25 日豊橋を出る東海道線の下り列車に乗車した当時 36 歳の直吉は、長崎から朝鮮半島へ渡り異国の第一歩を記した。以降、中国大陸からシンガポール、インドネシア、インド、中央アジアを経てヨーロッパへ。イタリア、フランス、イギリス、スコットランドはネス湖まで足をのびして地中海に戻り、スペイン、ポルトガルを経て船で大西洋を南下。1903(明治 36)年 5 月 11 日頃アフリカのケープタウンに上陸し、陸路、金鉱で有名だったキンバレーに入り、東海岸のダーバン、ザンジバル、タンガ、モンバサへ抜けて再び地中海へ。フランス、ドイツからロシアのペテルスブルグ。さらに北欧をまわってロンドン経由で、今度はアメリカ大陸を横断し、1905(明治 38)年頃に南米ペルーからアマゾン河を下ってブラジルのマナウス、ペレンへ。そこから再び北米を経由して、ハワイからオーストラリア大陸へ向かって太平洋を南下。ニュージーランド、オーストラリアを経て五大陸・世界一周の旅を達成し、1907年(明治 40)年 6 月 15 日、神戸に戻っている¹⁸。直吉が訪れた国は 60 カ国に及ぶ。

20 世紀初頭アフリカではエチオピア帝国とリベリア共和国を除いて、すべて列強の支配下に置かれていた。東南アジアはミャンマー・マレー半島がイギリスの植民地、ラオス・ベトナム・カンボジアがフランスの植民地、インドネシアがオランダの植民地となり、唯一独立を保ったのがタイであった。中国は、日清戦争の敗北以後、欧米列強が積極的に進出し、ロシアは東北地方、ドイツは山東地方、イギリスは長江流域と広東東部、フランスは広東西部と広西地方、日本は福建地方を勢力範囲に定めていた。

日本は明治維新以後急速に近代化を図り、1894(明治 27)年日清戦争に勝利し、欧米列強と同様な帝国主義の道を歩んでいた。1904(明治 37)年 2 月には朝鮮半島をめぐる日露戦争が起こり、アメリカの調停でポーツマス条約を結び、日本は韓国の指導・監督権を得た。

中村直吉が歩いた世界は、欧米列強により、アフリカやアジアが植民地化された時代であり、日本が積極的にアジアに進出した時代であった。

2) 日本の新聞記事に見る直吉

1901(明治 34)年 8 月 13 日『参陽新報』に、中村直吉は世界一周旅行に先立ち、「告別」という記事を掲載した。

「不肖今回世界一周旅行を企て将に発程せんとするに望み親愛なる知友諸彦に一言を述べて告別の意を表す。不肖勤学の時を得ず学識の量なく国家社会に対して便益する所なく慙愧に堪えず。然りと難とも十有六年間独立主義を持して経営する所幸に成功して今日あるに至れり。独立なるものは我真意にして天下の真理なりと信ず。若し独立心なくんば威信共に地に落ちて一の機関たると同じ。此に於てか小成に安するを得ず計らずも世界一周旅行の一大決心をなすに至り。天若し我に災せんずんば稜威なる大日本帝国に於て幸福なる諸彦に再会し世界各国の観察談をなすを得る遠きに非ざるべし。依て知友諸彦の多大なる御庇蔭に浴したるを拝謝すると共に我不在中も一層の御愛顧あらんことを希望に堪えず。出発に尚各地に於いて調査報告の御依属に応ずべければ至急御申出ありたし。」¹⁹

出発の日には、参陽社交倶楽部会員のなかより総代として 89 名が停車場まで見送り、豊橋

市呉服町内より数十名のものが旗を立てて見送った。

1902（明治 35）年 1 月『産陽新報』に、シンガポールから中村直吉の謹賀新年の挨拶が届いた²⁰。

「不肖世界一周旅行の途路明治三十四年を以て太平洋を通過し、三十五年の新春一月一日星架坡に於て目出たく御代に際會せり国を出て国を思うは座して非理屈を語る民よりも猶深し又 雑なる我旅日記中至る処の商業実地視察談或は以て非理屈者の空論千萬言に勝れるを信ず幸いにして不肖の目的と意志とに向い多少の御賛成有る方は我国家を愛し献身的視察を達する間我郷里なる専売帽子業に向かつて充分の助力を与えられ猶一層旧年に倍し御購求御愛顧めらんことを希ふ頓首」また、同じ紙面に 1 月 2 日発信で『産陽新報』に届いた直吉の書簡を「中村直吉氏の消息」として掲載し、香港滞在中に名古屋市の陶器商瀧倭氏と会い、販売の手伝いをしていたことやシンガポールの状況を伝えている。

1905（明治 38）年 6 月 29 日『新朝報』は「中村直吉の消息」を掲載した²¹。

「南米コロンビアの首府ボコタより一書差上候当地は実に海拔一万馱の高原にして満都白人種と申して可き有様に候（中略）コロンビヤ内地は首府の以東以北以西至る処沃土にして樹木繁茂せりオンダ市以南の丘陵は気候次第に温和にして最も珈琲に適し又砂糖、幾那摠の培養にも適せり鉱山多くして金銀銅鉄を出すと噂多しけれども住民極めて少なきが為此れを採取するに由なく言わばマグタレナ河の兩岸の無限の實庫は今狐狸の巢窟に委ねたる姿に候」更に「政府の力地方に及ばず人民悪風に染み外国人は旅行を不安心と致し候」と続け、「近時パナマの独立ありコロンビヤの前途甚だ憂うべきものに候」と結んでいる。

コロンビヤは珈琲、砂糖の生産に最適な場所であることや豊かな資源が開発されずあることを日本の企業家にアピールし、地方の政情不安、白人支配の国であるがそれが何時まで続くかという疑問を述べていた。

中村直吉に関する記事を掲載する新聞社が『産陽新報』から『新朝報』に変わった理由は定かでないが、当時豊橋ではこの 2 つの新聞はことごとく対立し、盛んに論戦を交えていた。明治 32 年に創刊された『産陽新報』は最初自由派の新聞であったが、次第に改進黨となった。『新朝報』は明治 33 年に創刊された『めざまし新聞』が 35 年に改題し『新朝報』となり、経営者は自由派であった²²。

1906（明治 39）年 6 月 15 日、16 日『新朝報』は「世界徒歩旅行者中村直吉氏」の記事で 2 年前に片山潜氏がセントルイス博覧会で、中村直吉に面会したことや、最近南米ペルーから帰国した河村八十雄と云う人がペルーで中村直吉と逢ったことから、直吉は「徒歩旅行を続けているに相違なく真面目にスタスタ歩いているに違いない」²³と消息を伝えている。

また直吉について「氏は貝色の浅黒い壮健そうな一種奇人的な相を備えた人である其幾年の間風に吹かれ雨に打たれた日光に曝された面貌は直に人をして程の好い探検家と云う観念を浮ばしむるであろう。身は常に皮製の着物を着け簡単なる革靴一個を携帯して居るが若し野蛮族へ往った時には此ゴロゴロおるである。学者かと云えばそうでない。少なくは英語を遣るがそれも格別の事はない英語を用いない国へ往けばその大切な手帳を出して手真似足真似で宿

を假るのである。兎に角奇妙奇烈妙不思議なる世界漫遊者と謂わねばならない」²⁴と述べている。

1906（明治39）年11月20日から12月2日『新朝報』の記者小野田盛次が、サンフランシスコで中村直吉から直接聞いた世界漫遊談を記事にまとめ、「世界漫遊者中村直吉」として8回にわたって連載している。露国で日探と疑われ補導された獄に繋がれ、脱出したこと（後に中村直吉がこのことを否定している）や、コンスタンティノーブルで日本公使の紹介でトルコ皇帝と謁見したこと、パリの停車場では大勢の人々が混雑なく整然と並び乗車する姿に欧州大國の首府の力に驚いたこと、ドイツでは各新聞社が争って氏の入京を報じて「嗚呼勇敢なる日本人世界漫遊者」と褒めたたえられ、「服装は其の儘でよいから即刻参内すべし」と招待されドイツ皇帝より拝見の栄を給ったことを伝えている。

1907（明治40）年6月23日『新朝報』は「中村直吉氏の帰朝」を報告している²⁵。

「中村直吉氏は東西十五万英里を踏破し世界各国に足跡を印し日出度六年間の漫遊を了り去る二十日神戸に帰着し来月上旬帰豊する。」3日後の26日には、直吉の帰国時の様子を詳細に説明し、出迎えの歓迎振りを紹介している²⁶。「呉服町札木町民を始め市内官民有志の出迎えしもの百余名に及びたる大口市長、市会議長、市会議員、山崎第四中学校長、各新聞記者等にして氏の下車するや、呉服町にて準備せし別立ての人力車に搭乗し二施の歓迎旗を先頭に押立て呉服町の自宅に帰着されたり。」

1907（明治40）年6月27日、28日、29日、30日、7月2日、3日、4日、6日、7日の9回にわたって、『新朝報』は中村直吉から聞いた旅行談を「世界一周旅行（中村直吉氏の談片）」として掲載している。この連載で直吉は、彼が実際に見てきた世界各地の様子を詳しく述べるとともに、私人の旅行であったため「明日の旅行は奈何にせんかな、奈何にして前進を計らんか、視察は奈何なる方策に依りて遂げんか」²⁷と旅の最初は苦難の連続であったが、次第にこの困難不便も旅行研究の真髓と了解して、精神上的の愉快は日に日に増加していったと無銭徒歩旅行の意義を語っている。

以上の日本の新聞に掲載された記事により、中村直吉の世界旅行をたどる事は出来るが、1902（明治35）年1月から1905（明治38）年6月の3年間の直吉の足取りは空白となっている。この3年半については、セントルイス万博を訪れた日本人の記事を掲載した米国の新聞に見ることが出来る。

4. 米国の新聞に見る中村直吉

1) セントルイス万博

セントルイス万博は、米国がフランスからルイジアナ州を購入してから百年を経過したことを記念して1904（明治37）年4月30日から12月1日にかけてミズリー州セントルイスで開催された。ルイジアナ地域最大の都市であるセントルイスは、ミシシッピー川に隣接し運輸の要衝であり、当時人口70万人（全米4位）を有し、煙草、麦酒、靴等の製造工業が発展していた。米国大統領マッキンレー（William McKinley 1843-1901）は1901（明治34）年8月20日「ルイジアナ地方の購買記念祝賀に参同せんことを乞い、又各其代表者を選びてルイジ

アナ購買記念博覧会に派遣し且各其国の富源工業及文化の進歩を最もよく表彰する物品を出陣せられんことを希望せる」と宣言し、世界各国に参同の招聘を發した。

セントルイス万博は敷地面積 514 平方キロメートルに及ぶ史上最大の会場内に 1576 の建築物が立ち並び、外国からの参加数 44 カ国で前回の 1900（明治 33）年パリ万博の 37 カ国を上回った。自動車、航空技術、無線電信の三つの近代技術をはでにデモンストレーションし、日露戦争の最中にもかかわらず、社会主義者の片山潜や文学者永井荷風、岡倉天心など日本から多くの人が見学に訪れた²⁸。

米国では 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、急速な工業化の進展や海外からの大量移民の流入、資本と生産の集中に伴う大型企業体の出現などによる社会経済の急激な変化により、貧富の差が拡大し、苛酷な労働条件や生活環境の悪化、政治の腐敗など社会、政治、経済問題を発生させた²⁹。



（セントルイス万国博覧会会場）³⁰

2) 米国の新聞と「世界各国旅行証明簿」

1904（明治 37）年 6 月 10 日、中村直吉については写真とともに以下のように掲載された。
“*GLOBE-TROTTER REACHES THE FAIR.*” 「世界旅行家が博覧会に到着、日本の K.中村、13 年にわたり世界を旅行中」日本国豊橋在住の世界旅行家で、商人と学生でもある K.中村が昨日、セントルイスに到着した。衣服は旅で汚れていたが、動きは機敏で、疲れは見られなかった。中村氏は、地球を一周するため、1891（明治 24）年 8 月に日本を出発してから、13 年間にわたり世界旅行をしている。

彼はその期間中一度だけ日本に戻った。故郷では商人であったため、旅の目的は世界の偉大な市場で商業研究をすることであった。放浪が終わったら、その観察結果を本に書いて出版するつもりである。中村氏は広範にわたり他の文明に足を踏み入れたことから、語学の達人となり、程度の差はあるが 6 カ国語を器用に話す。

彼は日本を発った時点では新聞社での在職経験はなかったが、すぐに日本のいくつかの新聞社から声がかかり、現在ではその中の東京と名古屋の大手日刊紙の通信員になっている。

中村氏はセントルイスに約1カ月滞在し、万博ならびにセントルイスの商業について学ぶ予定である。彼はすでに米国に数ヶ月滞在しており、米国全土に行っている。彼はフランシス総裁に面会するため、昨日事務所に電話をかけた³¹。

米国の新聞では、中村直吉の氏名は **K・Nakamura** となっているが、記事の内容や次に述べる「世界各国旅行証明簿」³²や片山潜との交流から、この記事に書かれた人物は中村直吉のことであると考えられる。

中村直吉が旅行中持参していた「世界各国旅行証明簿」には、セントルイス万国博覧会総裁 **David R. Francis** のサインが1904（明治37）年6月10日の日付とともに見られる。そのサインの下には日本帝国男爵松平正直、1904（明治37）年6月12日にセントルイス万国博覧会日本コミッショナーとしてのサインがあり、次のページには1904（明治37）年6月9日に片山潜のサインが次のような英文とともに書かれていた。「世界一周旅行をされている N. 中村氏に会って話をすることができたのは、私にとって大きな喜びでした。私は、彼に会ってかつてないほどの大きな喜びを感じています。なぜなら、彼はコートも着ずに、また金持ちとしてもなく、全世界の一人として旅をしてきたからです。彼は、人々の兄弟愛の健全な理念、ならびに人間性が試されてきたのです。今後の旅の成功を祈ります！」片山潜（ジョー）**Socialist** 編集長日本国東京と署名されていた。

中村直吉は、胸に太い布片を斜めに巻き、鞆には一冊の手帳と世界地図を入れていた。布片は、ハワイの国王から贈られたものである。手帳には、訪問した国々の王様、大統領、貴族、大臣、知事、政治家等の姓名がズラリと記してある。其の姓名は王侯貴族が皆珍しい男だと思つて深く之を愛し自ら其帳面へ姓名書き、その上この人は大探検家であるとか、何とか二三日ぐらい必ず記してくれていて、この手帳と胸部に懸けて居る布片を持っておれば、無銭旅行者であることが知ってもらえた³³。

この手帳「世界各国旅行証明簿」は、貴族院議員伊沢修二の書いた英語による直吉の紹介文が巻頭ページにある。次のページには、「健康の者に証明候也」豊橋病院長矢崎茂や中村直吉の身分宿籍年齢目的を書き、それを証明する愛知県渥美郡町山田正の署名がある。この「証明簿」には日本語で「明治三十七年七月二十六日中村直吉君来訪せらる 右証明す 在墨都杉村」とあり、署名者のメキシコの杉村公使から、中村直吉は歓待を受け、南米視察を特囑された。

1904（明治37）年5月14日「本日、N. 中村氏が、米国横断中に私の事務所を訪ねてきました。日本に、中村氏のような人や、その他にも会つてこのような喜びを感じる人がいるのなら、ロシアは厳しい戦いとなるだろう。彼の旅がとても楽しいものとなり、また、日米間の友好関係のより強力な友好を促進する手段となることを信じています。」ウイリアム H. という英文が見られるが、署名者がどのような人物なのか分からない。

「世界各国旅行証明簿」には、直吉が訪れた国の日本領事館の領事の署名が多数見られることから、いわゆる通行手形のような役割を果たしたと思われる。片山潜がこれを「中村直吉にとっては宝庫であり活歴史であり、世界探検家たる免許状である」「此の一冊が無限の価値ある信用状である」と述べている³⁴。

片山潜と中村直吉は、1904（明治 37）年セントルイス万博の会場で会った後、1906（明治 39）年にテキサスで再会した。片山潜は、雑誌「探検世界」で度々中村直吉を好意的に紹介している。

3）片山潜と中村直吉

片山潜（1859-1933）は、1903（明治 36）年 12 月渡米し、1904（明治 37）年 5 月にシカゴ社会党大会に出席後、セントルイス万博内のキモノハウス（北太平洋貿易会社の事業）の付属氷及びアイスクリーム店を監督しながら、近隣の市の社会党やセントルイス社会党大運動会で演説をしていた³⁵。セントルイスで新聞記者のインタビューに日露戦争について、次のように自説を述べた。「彼は日本での社会主義運動は政府の反対に遭い、最近までは人民の反対にも遭っていたが、現在は急速に勢力が増していると言う。片山氏の夢は、社会主義者が日本の国会で政治的支配権を得られるようになることであり、彼はこれについて全く可能と考えている。彼は、日本が東洋での現在の戦争に勝つと信じており、この戦争は大日本帝国に経済的な苦難をもたらすが、将来的にはアジアにおける今後の平和を確実にし、普遍的な平和の統制に大いに役立つだろうと確信している。片山氏は、博覧会の期間中セントルイスに滞在し、その後太平洋岸に行って、現地の日本人を社会主義者団体に組織化する予定である。8月にオランダのアムステルダムで開かれる国際社会主義者会議に出席することを、彼は期待している。」³⁶

片山潜は 1904（明治 37）年 8 月 14 日から 20 日にかけてアムステルダムで開かれた第 2 インターナショナル第 6 回大会に日本社会主義者代表として出席し、この大会に出席する最初の東洋人であり、日露戦争開戦時のため世界各国から注目された。片山潜はこの大会で露人ブレカーノフと握手し、社会主義の下には日露の敵国人も同胞の友であることを表明した³⁷。当時、イギリスやフランスの社会主義者の中には、日露戦争の勃発を歓迎し、抑圧的な帝政ロシア体制の崩壊の先触れと考える者も多かった。大会後再びセントルイスに戻った片山潜は、10 月中旬テキサスのヒューストンに移り、農場経営を始めた。

1906（明治 39）年、中村直吉はテキサスで片山潜と再会した。片山潜はこの再会を大変驚き、直吉の身体が益々健全、意思が愈々確固たるを見て、過去 2 年間中央アメリカ及び南米の地での探検談を聞くに及んで、心より感服嘆賞あるのみと 1906（明治 39）年 12 月号発行の雑誌「世界探検」で書いている³⁸。更に、「我国民が君の調査報告に依って得る所決して少々にあらざるべきを信ず」と述べ、直吉が世界各地を旅行できた理由として「世界各国旅行証明簿」の効用と日露戦争を挙げている。中村直吉はコスタリカの砂漠を徒歩で進むことは不可能と思い、同国の陸軍大臣宛に、世界漫遊の旅行家で、現下頗る窮境にあり乗馬を供給されたしと云う電報を打ち、陸軍大臣から馬を得ることが出来た。「日本を最もよく広告されたるは日露戦争であり」、この戦争の賛賞を得ることが出来るのは、専門同業家の軍人である。だから、直吉は陸軍大臣に近づいて成功したと片山潜は直吉の交渉能力の鋭さを指摘している。

片山潜と中村直吉は、1907（明治 40）年 11 月参陽社交倶楽部によって開催された第百回記念講演会で、ともに弁士として講演している。中村直吉は、もともと政治に関心が深かったが、

1928年（昭和3）年に社会民衆党から市議員に立候補し、結局5票で落選したが³⁹、片山潜の影響があったかもしれない。

4) 帰国後の中村直吉

1907（明治40）年6月25日東京朝日新聞は「世界大旅行者帰る」の見出しで、「六年間の星霜を費やし、十五万英里を踏破す」とサブタイトルをつけ、中村直吉の世界一周の旅程を述べ「今氏が旅行談の一節を左に掲げて世の惰弱なる青年子弟の為に一味の興奮剤たらしめん」として、中村直吉の言葉を次のように紹介している⁴⁰。「世界旅行というものは大体すべての学問に向かって世界の学校へ入るので、つまり我々はその世界を視察する書生なのです。今日はその学校を卒業して学士になったというわけです。このような旅行は、若い時よりも、海外の事情と日本の事情に通じ、経験と学力を備えた30歳以上40歳までに実行すると良い。」

1907（明治40）年7月1日読売新聞は「本日入京する全世界一周者」で、中村直吉について次のような記事を掲載した⁴¹。「あらゆる欧米の商工業を視察して能く当初の目的を達し先頃帰国したる世界徒歩旅行者中村直吉氏（43）は今日午後二時二十五分新橋着の列車にて東都の人士に接せんとす。」記事は中村直吉の経歴を紹介し、今回の東上の目的が浅草の実兄に旅行中の物語をするためであるが、「都人士が此空前の大旅行者より精神的に授受する利益は蓋し僅少ならざるべし、されば浅草区の有志は今日氏の来京を新橋に迎えて大いに之を歓迎せんとす。」翌日の記事は、集まった群衆に謝辞を述べ、勇壮なる楽隊に送られ、先に各新聞社を歴訪したとある⁴²。

中村直吉は、帰国前後から注目を浴び、豊橋の新聞だけでなく全国紙である朝日新聞や読売新聞にも掲載され、青年たちに大いに刺激となるとその行動力が称賛されている。帰国後、その体験談を本にまとめ出版するとともに、多くの講演会に招かれ講演している。新聞に掲載された講演会は、1909（明治42）年10月「華族会館記念式」の余興で「中村直吉氏活動写真により面白く五大州探検を演じた。」⁴³、1910（明治43）年7月には南極探検隊応援演説会で「南洋航路及ニューージーランドの幻燈説明をした。」⁴⁴とある。当時の政治家たちも直吉の冒険心を激賞、移民を推進する拓務省の依頼で各地を講演して歩いたようだ⁴⁵。

中村直吉は、帰国した翌年『新朝報』の記事「第四中学の講話」⁴⁶によれば、愛知第四中学校で世界漫遊講話が開催され、同校生徒の4年生と5年生が聴講したとある。開会に当たり同校教員より生徒に希望の問題を提出させ、その問題に付いて中村直吉氏が講話したという記事が掲載されている。4年生が提出した問題は「ドイツ農民状態」「ヨーロッパの風俗」「米国紀行」「欧州学生の気風」「植民地としてのオーストラリア」「アフリカ土長の生活状態」、5年生が提出した問題は「南米における風俗及び我国殖民の状態」「各国巡查の制度及其性質」「トルコにおける日本住民の状態」「北米に於ける我國民の成功者」「各國人の認めたる我國の真価」であった。

愛知第四中学校は、中等教育を希望する人のために明治26年に私立補修学校時習館が開設され、28年に町立に移管され、33年に県立第四中学校となった。生徒は地元出身者のほかに

他府県からも来ていた⁴⁷。上記の質問を見ると、4年生は主に世界の地理環境に興味があるが、5年生になると世界における日本の位置を考えるようになっていくことが伺われる。中村直吉がどのような講演を行ったのか大変興味深い。

5. 社会科授業指導案

現在読んでも大変面白く、生き生きと世界の状況を書いている中村直吉の無銭徒歩世界一周旅行を教材として、歴史の授業を下記のように提案する。直吉の6年間に及ぶ世界一周旅行を掲載した明治の新聞記事を読む事によって、子どもたちが当時の世界や日本の状況を具体的に把握し、直吉の考えや直吉の講演を聴いた人の気持ちを理解し、明治時代が日本にとってどのような時代であったか、考えさせる授業を実施したい。

新聞記事を資料として使用する時、記事を書いた人や直吉の思想が記事に反映される場合もあるので、使用する記事の内容を批判的に読む必要がある。いくつかの新聞を比較して読むことによって、子どもたちに資料を吟味する技能を育成出来る。さらに、歴史的推理を授業に取り入れたい。歴史学習には2つの活動があり、一つは他者が叙述した歴史物語に触れさせる活動、すなわち歴史認識である。もうひとつは自分で歴史物語を生み出させる活動、すなわち歴史的推理である⁴⁸。

一連の中村直吉に関する新聞記事から、子どもたちに直吉の伝記を作成させたり、直吉の講演会を再現させたりする活動を通して、子どもたちがどの記事の内容を選ぶのか、思考力、判断力、表現力を育成できると考える。

授業は以下のように三段階から構成される。

第一段階では、以下のことから世界や日本の状況、直吉の旅行の全体像を把握させる。

- ①20世紀初頭の世界と日本の政治・経済・地理的状況について説明する。
- ②中村直吉の世界一周旅行の概要と直吉が旅行経路を書いた世界地図を示す。
- ③『産陽新報』『新朝報』『東京朝日新聞』『読売新聞』『米国の新聞』の新聞記事を時系列に示す。電子黒板等を使用して原文を見せ、現代文に直した記事をプリントにして配布する。

第二段階では、以下の4点について自分の意見をまとめ、発表させる。

- ①中村直吉はなぜ無銭世界徒歩一周旅行に行ったのか。
- ②中村直吉は世界で何を見たのか、誰に会ったのか、どのように考えたのか。
- ③世界の人は中村直吉をどう見たのか。
- ④帰国後の直吉を世論はどう評価したのか。

第三段階では、児童生徒の興味・関心に応じて以下の活動を行う。

- ①直吉の伝記を書く。紙芝居、絵本の作成なども考えられる。
- ②直吉の講演会を再現する。講演会の原稿を書く、聴衆となって質問を考える。
- ③新聞記者になって直吉の記事を書く。直吉の記者会見やインタビュー場面を再現しても良い。

授業の対象学年は、歴史を学んだ小学校6年生や中学校1年生を想定しているが、新聞記事を簡略化すれば小学校4年生、5年生でも実施できると考える。

6. おわりに

中村直吉は当時の小学校教員の月給が 10 円の時 100 円のカンパを集め、無銭徒歩世界一周旅行に出発した。直吉の旅行が成功したのは、彼の強靱な精神力と臨機応変な行動力とともに、世界各地に滞在していた日本人や日本の領事館の協力があったからである。直吉が「時は日露開戦当時にして、我軍の連戦連勝の報到るや、米人の我国人に好意を表すると、常非ざるなり」⁴⁹と述べるように、世界が日本に注目していた時であり、旅先で多くの好意的待遇を得ることが出来たのは日露戦争の大きな影響があったと言える。

中村直吉が旅した 20 世紀初頭のアジア、アフリカ、南アメリカは欧米列強により植民地化が進んでいた。日本は日清・日露戦争に勝利し、欧米列強と同様な近代国家であると自負するとともに、アジアでの覇権を得ようと模索していたまさに大転換期であった。直吉は日本人があまり足を踏み入れていないアフリカや南米の奥地まで行き、日本の外から直接自分が見た世界の最新情報を新聞社に伝えた、いわゆる特派員であった。

中村直吉が世界一周旅行した動機としては、世界の商工業や風俗などの新知識の習得や日本の企業家への情報提供が挙げられる。明治政府は、日本の見本となる国や日本人が移民できる国を探そうとしていた。直吉は、明治政府が求めるような情報を提供するだけでなく、彼自身が世界各地で感じた人種差別、移民問題、欧州とアジアの比較等について述べており、直吉に関する新聞記事から子どもたちは当時の世界状況を知るだけでなく、明治の人の思いや願いを理解するなど多くのことが学べると考える。

¹ 参加国が共同して国際的に開発し、実施している 15 歳児を対象とする学習到達度調査であり、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの 3 分野について調査している。2009 年に 65 か国・地域 (OECD 加盟国 34、非加盟国・地域 31)、約 47 万人の生徒を対象に調査を実施した。日本は、15 歳児の定義に従い、高等学校 1 年生を対象に実施した。

² 文部科学省 <http://www.mext.go.jp/a-menu/new-cs/gengo/1322412.htm> 「言語活動の充実に関する基本的考え方」2013 (平成 25) 年 1 月 20 日参照。

³ 同上。

⁴ 『教職必携ハンドブック』教育開発研究所 2003 (平成 15) 年 52 頁。

⁵ 川瀬芳彦「明治時代に世界を歩いた豊橋の冒険家—中村直吉が見聞した世界の国々—」『豊橋市美術博物館研究紀要』第 13 号 2004 (平成 16) 年。

⁶ 佐藤有紀・久保田亘「『昔の新聞』の授業活用法を探る—中学校社会科における学習材化の紹介—」『埼玉学園大学紀要 (人間学部篇)』第 10 号、2010 (平成 22) 年。

⁷ 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会』東洋館出版社 2008 (平成 20) 年 41-42 頁。

⁸ 同上 73 頁。

⁹ 同上 84 頁。

¹⁰ 文部科学省『中学校学習指導要領解説社会編』日本文教出版 2008 (平成 20) 年 68-69 頁参照。

¹¹ 同上 90 頁。

¹² 同上 71 頁。

¹³ 前掲「『昔の新聞』の授業活用法を探る—中学校社会科における学習材化の紹介—」310 頁。

¹⁴ 藤井千春訳『社会科教育カリキュラム』、株式会社ルック 2009 (平成 21) 年 199 頁。

¹⁵ 前掲「明治時代に世界を歩いた豊橋の冒険家—中村直吉が見聞した世界の国々—」23 頁。

¹⁶ 豊橋市中央図書館『第 12 回三遠南信地域資料展 冒険者たち』2009 (平成 21) 年 17 頁。

¹⁷ 『豊橋百科事典』豊橋市文化市民部文化課 2006 (平成 18) 年、534 頁。

¹⁸ 神山典士「明治の探検家・中村直吉の好奇心」豊橋図書館編集 2004 (平成 16) 年 35 頁。

¹⁹ 中村直吉「告別」『参陽新報』1901 (明治 34) 年 8 月 13 日。

-
- 20 中村直吉「謹賀新年」『参陽新報』1902（明治35）年1月23日。
- 21 「中村直吉氏の消息」『新朝報』1905（明治38）年6月29日。
- 22 『とよはしの歴史』豊橋市、1996（平成8）年、201頁。
- 23 「世界徒歩旅行者中村直吉氏」『新朝報』1906（明治39）年6月15日。
- 24 「世界徒歩旅行者中村直吉氏（つづき）」『新朝報』1906（明治39）年6月16日。
- 25 「中村直吉氏の帰朝」『新朝報』1907（明治40）年6月23日。
- 26 「中村直吉氏の帰朝」『新朝報』1907（明治40）年6月26日。
- 27 「世界一周旅行（中村直吉氏の談片）（一）」『新朝報』1907（明治40）年6月27日。
- 28 農商務省『聖路易万国博覧会本邦参同事業報告』第一編、第二編1905（明治38）年。
- 29 藤瀬浩司『欧米経済史—資本主義と世界経済の発展—』放送大学教育振興会1999（平成11）年138-139頁参照。
- 30 TIMOTHY J. FOX and DUANE R. SNEEDDERKER “FROM the PALACES to the PIKE : Visions of 1904 World's Fair” Missouri Historical Society Press, 1995, p.1.
- 31 Scrapbook, vol. 12, p.125. St.Luis Public Library.
- 32 『世界各国旅行証明簿』豊橋市中央図書館所蔵。
- 33 「世界無銭旅行者中村直吉（つづき）」『新朝報』1906（明治39）年6月16日。
- 34 片山潜「中村直吉君全世界探検談」『探検世界』第二卷第三号1906（明治39）年。
- 35 片山潜「米国だより」『片山潜著作集第二卷』河出書房1960（昭和35）年178頁。
- 36 Op. Cit., Scrapbook, Vol.12, p.120.
- 37 隅谷三喜男『片山潜』東京大学出版会2007（平成19）年149頁。
- 38 前掲「中村直吉君全世界探検談」。
- 39 大森修『東三地方史研究』「明治期における豊橋人の海外体験」。
- 40 「世界大旅行者帰る」『東京朝日新聞』1907（明治40）年6月25日。
- 41 「本日入京する全世界一周者」『読売新聞』1907（明治40）年7月1日。
- 42 「世界徒歩旅行者昨日入京す」『読売新聞』1907（明治40）年7月1日。
- 43 「華族会館記念式」『東京朝日新聞』1909（明治42）年10月8日。
- 44 「昨日の南極探検演説会」『東京朝日新聞』1910（明治43）年7月31日。
- 45 富田昭次『旅の風俗史』青弓社2008（平成20）年147頁。
- 46 「第四中学の講話」『新朝報』1908（明治41）年5月3日。
- 47 前掲『とよはしの歴史』228頁。
- 48 前掲『社会科教育カリキュラム』68頁。
- 49 「世界一周旅行（中村直吉氏の談片）（五）」『新朝報』1907（明治40）年7月2日。